

# 日本人の人種観と黒人問題

——大正期を中心として——

佐藤 宏 子

(一)

日本人の目の前に黒人が最初に現われたのは、おそらく南蛮人の従者として渡来した人達であつたらう。しかし、これらのアフリカ人達は、辻邦生の『安土往還記』や遠藤周作の『黒ん坊』に描かれているように、単に人々の好奇心をあおつたものであつたと思われる。以後長い鎖国を続けていた日本人が、人種問題、特にアメリカに於ける黒人問題に関心を持ちはじめたのは、当然明治期以後のことである。明治期にはかなりの数の人がアメリカ旅行記の類を書いているが、不思議なことに大部分の人は、召使いとして又下層の労働者として目に触れる黒人に対して何の注意も持っていないのである。

明治期の渡米者の中で、おそらく一番米国の人種問題に関心を持ってゐるのは片山潜ではないかと思われるが、その彼でさえ、明治十七年（一八八四年）に渡米し、キュ・クラックス・克蘭団の本拠地の一つ

日本人の人種観と黒人問題

テネシー州のメリーヴィル大学に学び、後にアイオワ州の黒人や貧しい白人のためのグリーンネル大学に学びながら、黒人問題については『自伝』の中で次のように触れているだけである。

「メリーヴィルは旧奴隸州の一小村落にして頗る田舎じみたる所、住民は甚だ不活発にして其挙動行為も亦桑港などの人民に比して甚だしく遅鈍に見えた。そして其風習は固陋頑強にして黒人を嫌悪するは一種の天性かと疑程である。」<sup>(1)</sup>

「此の大学は黒人と貧白人の爲めに設けられた大学であるのにも拘わらず、全校の教授及学生等が黒人の生徒を取扱うのに不公平なことは予の常に不快を感じた。」<sup>(2)</sup>

休暇中には英国に渡り、その社会状況の観察から社会主義へと目ざめた片山であつたが、彼には、黒人の置かれている社会状況の把握もないし、南北戦争後の再建時代を「内戦の局面ののちの真に革命的な局面」<sup>(3)</sup>

として捉え、その失敗の中で黒人達の運命を憂えたマルクスやエンゲルスのような深い洞察も見られない<sup>(4)</sup>。

これは明治期の渡米者に共通のことであり、おそらく、日本人の抱いていた西欧のイメージ、アメリカのイメージが関係してくるのではないかと思われる。片山潜が『渡米案内』を書き、自由の天地として米国移住を奨励した時代に於ては、多くの日本人にとって西欧化は日本の進歩と考えられていたのであり、渡米した日本人の目に写った黒人やアメリカ・インディアンは、西欧の文化によつて啓蒙教化さるべき人間であつたことは不思議ではない。

内村鑑三は、明治二十八年（一八九五年）一月の『国民の友』に「アメリカ土人の教育」という一文を書き、ペンシルヴァニア州のカーライルにある、プラットという旧軍人の経営するインディアン学校を訪問した折のことを述べている。

「彼（IIプラット氏）の目的は米国土人三十万をしてことごとくキリスト教的開明人種となすにあり。彼の訓育のもとに成長せし銅色人にして、今は医士となり代言人となりて白哲（はくせき）人種と生存競争をなしつつある者あり。彼は開明人と離れて土蕃を住居せしむるの非を唱うる者なり。人種的区别は、米国人たる彼の政治思想とキリスト信徒たる彼の宗教心が共に激しく反対するところなり<sup>(5)</sup>。」

ここに見られるのは一種の米国人の理想化であり、ピューリタンのよ

い面だけを見てその独善性に気付いていなかったということであろう。

この点でアメリカ・インディアンの運命に深い同情を寄せた人に野口米次郎がある。明治三十年（一八九七年）に書かれた「米国加州の自然美」と題する旅行記の中で、先ず次のような言葉で白人の逞しさを認めている。

「八十年前の土人今は何処にある。白哲人は晴雨を論ぜずシニラ山頭に立つて金鉞を穿つた、暴風雨に沐浴し徒手空拳で一大国を建設した。隣れる土人の弓矢は白人の銃砲の匹敵でなく、恤々乎として食を得ざるに至らんことを恐れて、追々山林の幽谷に匿れて仕舞つた。八十年後の加州は今日別天地である。昨日暗黒の場所は光明の処となり睡眠せる処は覚醒の処となつた。…実に加州の歴史は夢の歴史である<sup>(6)</sup>。」

しかし、それに続いてこの開拓の犠牲になり文化を破壊されたインディアンに対して、次のような言葉が記されている。

「このシャスタ山麓に百年前には傲然として四隣を威服していた土人の三強部落があつた。…それ等の三強部落の土人は生血の悲劇を演じた。彼等は神を信じ人を敬した、然るに彼等は白人の奪掠に安んぜざる可らざるに至つた。彼等の林間に於ける礼拝の地は蹂躪せられ、厳肅なる婚礼の舞台は破壊せられた。…一度彼等が白人種に奪われんか再びそれを取返すことが出来ず、彼等を奪つた白人は鉄槌の響を上げて金鉞を穿ち始めた。彼等土人はこれを訴うるに文字なくただ地に向つて呼号す

るのみであつた。<sup>(7)</sup>」

彼の「土人と雖も人間である。百も千も血を流した悲劇が此処に埋没しているのであろう」<sup>(8)</sup>という言葉の中に、インディアン独自の文化の滅亡に心を痛めた共感が見られるが、やはり内村の場合と同様に、自分は白人の側に立つ文明人であるという態度が感じられる。

明治時代に書かれたアメリカ旅行記の中で自分が白人とは異った黄色人種であるという意識をはっきり出しているのは、戸川秋骨である。明治三十九年から四十年（一九〇六年から七年）にかけての旅を「北米大陸横断の記」としてまとめているが、その中の十月十一日の項には「白黒、黄色―寝台車」という題がつけられている。汽車で間違えて戸川の席に座っていた白人との間の悶着を、黒人のボーイとのやりとりも交えて描いたものだが、その結びとして、「かくの如くにして白は黒に荷物を持たして次の車へと差していった。此の処黄色の大出来<sup>(9)</sup>」という言葉が見える。戸川は自分の肌の色の違いを明らかに意識をしていたが、彼の黒人に対する態度は「黒ン坊のボーイ」とか「黒ン坊と白人との雑種<sup>(10)</sup>」といった言葉からもうかがえる通り、自分より劣った者といったものである。

このような明治期にアメリカを訪れた日本人の黒人問題に対する無関心の理由を幾つかあげることが出来る。第一に同一民族の国である日本に於て人種の意識が稀薄になることは当然であるし、アメリカという国

の理解が不足していたことも考えられる。あこがれの米国の土を踏んだ人々は、アメリカ社会に存在する階層をそのまま受け入れてしまい、一人種が他人種を支配する異常な社会制度には目がむかなかつたのである。

このような状態に変化が起るのは、カリフォルニア州に於てアメリカ人労働者の間に日本人移民排斥運動が激しくなつてからである。しかし、この時でもこの一見経済問題とみえるものの背後にある、有色人種に対する偏見に気がついた者は殆んどなかつた。明治四十二年（一九〇九年）に発行された『日米交渉五十年史』は、「況むやかの排日運動たるや一部少数者の煽動に由るものにして一般多数者の輿論にあらざるをや<sup>(10)</sup>」と述べ、この事件を「彼地に於ては日本移住民の発展膨脹に対し悪感情を有せる一部の人士ありて、彼等は機を見て日本人を駆逐し、以て我同胞をして清国人と同一の運命に陥れむと計図せる者あるに於てをや<sup>(11)</sup>」と、経済問題としてとらえている。この言葉には、日本人の心の中に敗戦国清国に対する軽蔑と偏見があつたことが自国に対する自信と共に明らかに示されて居り、これが今後の日本人の人種問題の根底にあるものである。一八九〇年（明治二十三年）に早くも始まっていた排日運動に対して、

「エスキモーとオーストラリア土人以外の世界のあらゆる人種のルツボであるといわれるアメリカは、人種間の絶えざる緊張と和解をくりか

えして今日に至っている。従って中国人や日本人に対する迫害もアメリカの歴史のなかにおいてこれをみれば、いつもくりかえされてきた珍しくもない現象の一つという見方もあるかも知れない。しかし、その迫害の期間の長さにおいて、その激しさと徹底さにおいて、到底他のヨーロッパ系人種と同日に談ずることはできない。…東洋人はその肉体的特徴のためにいつまでもアメリカ社会の異邦人として残らなければならなかった。<sup>(12)</sup>

という指摘が可能になるには、なお数十年の年月と多くの苦い経験が必要であったのだ。

## 註

- (1) 片山潜『自伝』岩波書店 昭和二十九年 一四八頁
- (2) 前掲書 一五三頁
- (3) 本田創造『アメリカ社会と黒人』大月書店 昭和四十七年 一九頁
- (4) 内村鑑三『アメリカ土人の教育』『内村鑑三信仰著作全集』第二卷 二三三頁
- (5) 『世界紀行文学全集、アメリカ カナダ』修道社 昭和四十六年 一四頁
- (6) 前掲書 一五頁
- (7) 前掲書 一四頁
- (8) 前掲書 一四頁
- (9) 前掲書 五七頁
- (10) 『日米交渉五十年史』大日本文明協会 明治四十二年 四七五頁
- (11) 前掲書 四三四頁
- (12) 若槻泰雄『排日の歴史』中公新書 昭和四十七年 六二頁

## (二)

大正期に入ると事態はかなり変わってくる。白人を相手にして戦った日露戦争の勝利とヨーロッパ各国のアジアでの露骨な利権争いは、日本人の中に黄色人種としての認識を持ちこんだ。ここで考えてみたいのは第一次大戦に到るまでの日本の動きとそれを支えてきた思想であり、特に「人種」という観念が如何に日本の政治に作用したかを見ることは興味深い。

明治維新以来、先進諸国に追いつこうとして発展していった日本の中には、福澤諭吉等のとなえる「脱亜」の道と、「世界政治が人種戦争の方向にむかいつつあるとみて」、<sup>(1)</sup> 日本をアジアの一国と考へ、アジア人の団結の必要をとき、やがてアジアの盟主たらんとする道の二方向があったと考えられる。特に日露戦争に関しては、ウイルヘルム二世のとなえた「黄禍論」に端を発した人種対人種の意識から、白色人種に対する黄色人種の勝利であり、現在までの白人支配に対してアジア諸民族を勇気づけるものであるという考え方があった。その反面、上田万年のように、「同じ黄色人種でも、日本人は文明的の国民で、支那や朝鮮や其他の東洋人と同じように見てもらつてはならぬ」<sup>(2)</sup> (明治三十七年、「十大戦家時大観」郁文舎)といった態度も見られるのである。

このような二つの流れが、アジア人の団結へと、白色人種に対立する存在としての有色人種という形をとってくるのは第一次大戦前後に於て

である。政界元老の一人である松方正義も「白人連合」への不安を抱いていたことであるし、大正三年（一九一四年）八月には元老山県有朋が、人種戦争という見地からの世界戦争に深い不安を抱いて政府に意見書を送っている。その大要は、岡義武著の『山県有朋』によれば、「ヨーロッパの戦争はスラヴ人種とゲルマン人種との争いがアングロ・サクソン、ラテン両人種の争いに拡大したものである、今日の世界政治の重要な動因は人種闘争である、従って、ヨーロッパ諸大国が戦後関心をふたたび極東に注ぐようになった暁には、白色人種が提携してアジア人に立ち向うようになる惧れがある、わが国としては白色人種の将来のこの攻勢にそなえて、袁世凱に世界政治のこのような大勢を説いて、日中の提携をこの際固めねばならない。」

というものであった。このように、第一次大戦という出来事は、すでに黄禍論とか、アメリカのカリフォルニア州に於ける日本人移民排斥問題とかで人種という意識に敏感になっていた日本人の心の中に、「世界政治を規定する要因として人種観念をきわめて重要視する傾き<sup>(3)</sup>」を作りあげるようになったのである。このようにして、未来の人種戦争に対する不安と恐怖が日本人の中で高まっていったことは否定出来ない。そのことが、パリ平和会議に於いて、日本が人種平等案を提出した一つの理由ともなるのである。「国際連盟創設の機会に、連盟の標榜する国際平和と国際正義とに結びつけて、国際連盟規約の中に人種的差別待遇を否認

した字句を挿入しようと試みた<sup>(4)</sup>」この提案は、移民に対する差別待遇の廃止、又外交上、将来移民の自由を要求するための一つの布石として試みられたものであるが、同時に、将来の国際平和のために人種上の平等が必要であるという理想論もふくまれてはいた。当時の新聞の論調はこの点を支持し、大正七年（一九一八年）十二月十日の東京朝日新聞の「講和の根本方針」というコラムには、「人種平等の説は、国際同盟加入の前提たらざるべからず。」という言葉がみえる。又、同じ記事の中に、「近時人種宗教上よりする欧米人の偏見を去らしめ、少く共亜細亞民族に対する平等の権利を主張すべしとの意見、有力となり来れるが如き、最も吾人の意を得たる所なる」という一節があるが、この黄色人種の代表のような意識は結局一人よがりの亜細亞民族保護の立場である。そのことは、同じ平和会議に日本が示したもう一つの提案を見れば明らかになるであろう。大正八年（一九一九年）二月一日の東京朝日新聞には、講和問題の記事の中に、「日本は講和会議に於て国際連盟の基礎として米国のモンロー主義と同等の立場に於て極東に於ける日本のモンロー主義を承認せん事を求めたり」と伝えている。そこで日本が要求したことは、「亜細亞及び太平洋に於ける未開の地方に日本人移民及び貿易の自由を保障せしめ東洋に於ける其優越権を承認せしむる」ことにあるのである。これは、ヨーロッパ列強による亜細亞支配という当時の情勢と、戦勝国という日本の自負とを考えてみれば当然出て来る主張で

はあるだろう。しかし、このような日本の態度がやがてどのような道に日本を導いていったかは、それ以後の歴史が明らかにしているし、このような要求と共に出された人種平等案がその本質に於てどのようなものであったかは説明の要はないであろう。

又、当時アイルランド系移民出身の上院議員ジェームズ・フェランの煽動によって再燃していた米国に於ける排日運動に関しても、「これは全く日本に対する一大迫害たるに相違なく」（大正八年六月三十日、東京朝日新聞）、在留邦人の米化運動アメリカ化運動によって解決出来ると考えていた。ここには、米国人の心の中にある有色人種に対する微妙な軽蔑感と恐れのの認知はなく、強大になった日本への誇りがあるだけである。

日本の平和会議での人種平等の主張が、実は日本人の東洋人に対する公然たる差別という二重の基準にもとづいているものだという事に気付いていた人は非常に僅かであった。その数少い一人が吉野作造である。彼は「人種的差別撤廃運動者に与ふ」という一文の中で次のように述べている。

「この立場からわれわれは…人種差別撤廃運動者に向つて朝鮮統治策の可否に注目を怠らざらんことを希望せざるを得ない。今日我国の法制が朝鮮人に与ふるに著しき差別待遇をもつてせることは隠れもない事実である。…一例を採れば朝鮮人の子弟は全然日本人児童の学校から除外されている。…かくの如きは学童問題をもつて桑港当局者の非を鳴らし

た日本民族の公然と誇示しうべきではない。」<sup>(5)</sup>吉野のように醒めたしかも人間としての目でアジアに於ける同じ肌の色をした人々に対する日本の行為を見ていた人は少かった。多くの人々は、黄色人種の主導者を自ら任じた日本の将来の発展を考えていただけである。

この人達は、ヨーロッパ諸国やアメリカという白人の国に対抗する為に日本がしなければならぬのは、強力な統一国家を作ることだと考えた。平民主義を唱え、民友社を設立し、『国民之友』と名付けた雑誌を発行した徳富蘇峰の「変節」もその一つの現れだったと言えるだろう。平民を基盤にして下からの国家形成を考えた若き日の蘇峰は、「国家生存」の必要から『自伝』の緒言に見られるように、「個人的平民主義より国家的平民主義となり、自由平和の理想家より、力の福音の信者となり、ついに帝国主義者として東洋自治論を唱道」<sup>(6)</sup>するようになるのである。アジアに於ける日本の使命は西欧帝国主義と対決することであり、国内に於ては階級的分裂をさけて強力な国家統合を行うという目的を達成するためには、ある目的のためには自己を犠牲にして邁進する人間を養成することが必要であつたらう。

このような国権的ナシヨナリズムを背景にし、世界の動きを人種間の斗争の形でとらえようとした大正期には、米国の黒人問題は日本人の目にどのような写り、どのような形で日本に紹介されたのであろうか。

- 註
- (1) 岡義武「国民的独立と国家理性」『近代日本思想史講座』第八巻 筑摩書房 昭和三十六年 四三頁
  - (2) 前掲書 四五頁
  - (3) 前掲書 五四頁
  - (4) 前掲書 六一頁
  - (5) 「人種的差別撤廃運動者に与ふ」『吉野作造』、日本の名著 第四十八巻 中央公論社 昭和四十七年 四五頁
  - (6) 「自伝」『徳富蘇峰 山路愛山』、日本の名著 第四十巻 中央公論社 昭和四十六年 三四頁

(二)

第一次大戦直後、妻愛と共に世界一周の旅に出た徳富健次郎（蘆花）は、その記録をまとめて『日本から日本へ』という本にして大正十年（一九二〇年）に出版している。一九一九年十一月二十七日、ロンドンにあった彼は、「新聞を見て、米国の白黒人の衝突が心を痛める。私の還元が唯一の方法らしい、それが自然であるから。」<sup>(1)</sup>と書いている。これは同年七月にシカゴの水泳場での黒人少年溺死事件に端を発し、アーカンソー、ネブラスカ、テネシー、テキサス、首府ワシントンへと広がっていった暴動の記事を読んで書かれたものと考えられるが、彼のこの「還元」とは一体どんな方法であったのだろうか。それはアメリカに渡ってからの彼の言葉から明らかになってくる。

「米国は…リンカアンの博大なデモクラシイの精神に帰り、リンカア

日本人の人種観と黒人問題

ンの始めた黒人解放の事業を完成す可きである。それは黒人を挙げて其故郷亜弗利加に帰へす事だ。<sup>(2)</sup>

同様な考え方は、ニュー・オルリーonzを訪れた時の記述にも見られる。

「午後五時半 Taxi で Union Station に行く。待合室でアイスクリームなど食べる。噂に聞いた通り、此處の停車場でもちゃんと“Coloured”の待合室を分けてある。黒人の社会を分つのだ。Lincoln の黒人解放は、手はじめをしたに過ぎなかつた。全い解放は、黒人の中に Moses が現れて黒い眷族引具つて Africa に帰る日にはじめて行はれる。今は此眷族が大じかけの年期奉公、留学中とも言えよう。<sup>(3)</sup>」

徳富蘆花にとっては、奴隷としてアメリカに連れてこられて以来三百年にわたる苦難の歴史は問題にならないし、差別されている黒人に対する同情も、又その差別に対する怒りも感じられない。この黒人がアフリカに帰るといふ問題もアメリカでは既に一八一六年に自由黒人送還協会が設立され、リベリアが建国されたにもかかわらず、多くの黒人がそれに反対したという事実がある。その反対の理由はいわゆるアイデンティティの問題である。黒人といえどもアメリカ人なのだ。この点にも彼の考えは及んでいない。彼は汽車の黒人のボーイを「黒いの」といふ言葉で軽蔑的に片付けてしまっている。彼に言わせると黒人は「アメリカ人にとつて獅子身中の蟲<sup>(4)</sup>」なのである。

同じことが彼の日本移民に対する態度にもうかがえる。彼は、カリフォルニアの日本人達を前にして講演した時に、アメリカ人の排日は当然のことであると言ひ、次のように述べている。

「私は米国が第一に支那人を排斥し、今度日本人を排斥するを喜ぶ。更に進んで黒人を排斥してもらいたい。黒人は亜弗利加に帰るべきだ。Lincoln に始まつた黒人の解放は、亜弗利加帰還に終らねばならぬ。」<sup>(5)</sup>

経済、歴史、社会的問題を全く無視したこの素朴な解決策が大作家の筆になり、公表されるということは今から見れば信じ難いことであるが、又、当時の日本の実状をよく示していると思われる。ここには、人種のつばであると言われるアメリカで何故中国人、日本人、黒人が排斥され、ヨーロッパ諸国からの移民は受け入れられるのかという問題が見落され、白、黒、黄の各人種がそれぞれ統一集団を作っているかのよう<sup>(6)</sup>に考えた当時の人種観を反映している。その考え方が、彼の日本の過剰人口の處理に関する提案にも示されている。カリフォルニアの日本人移民はアメリカを去るべきだと述べた後で彼は次のように言っている。

「然らば日本の過剰人口を以て将来如何すればよいか？ 私は知らぬが、米国を立退く日本人の行く所は必与へられる、と信ずる。北か南か、日本人の行く處は必近くにある。遠走りするに及ばない。」<sup>(6)</sup>

このような考え方にそれ以後の日本のあやまった進路の芽を読み取ることは難くない。アメリカの中での異人種の問題をとりあげてその分離

を唱えた彼が、アジアの国に侵入していく日本のあり方には何の疑問も感じていなかった。おそらく、黄色人種としての一つの団結という形で簡単に考えてしまつていたのであろう。

しかし、徳富蘆花がこのような人種分離の考えに到達した理由は、それが「自然」であつたからというだけではない。彼は、当時日本人の多くが意識しはじめた太平洋を舞台にしての日米の緊張を緩和し、日米間の戦争をさけたかったのである。彼は、「日米の間は：思ふ以上に切迫して居る」<sup>(7)</sup>という認識に立つて、「日米問題を解決する鍵は唯一」<sup>(8)</sup>だと言ふ。「それは亜米利加の立場に立つこと」<sup>(8)</sup>であつた。この観点から彼は黄色人種も黒人もそれぞれの故郷（黒人に故郷があればの話であるが）へ帰るべきだと考えた。おそらく、平和を願う彼にとって、これは実行不可能なものにして、唯一の考え得る解決手段であつたのだろう。ここに示されるのは、最早、明治期の素朴な旅行者の目とは違ふ、国際社会の中の日本という重荷を負つた視点である。

## 註

- (1) 徳富健次郎、愛『日本から日本へ』西の巻 国民教育普及会 大正十年 一一〇〇頁
- (2) 前掲書 一三〇九頁
- (3) 前掲書 一三四一頁
- (4) 前掲書 一三〇八頁



- (5) 前掲書 一三七―一頁
- (6) 前掲書 一三七―二頁
- (7) 前掲書 一三六―八頁
- (8) 前掲書 一三六―九頁

(四)

大正期には数冊の黒人問題関係の単行本が出版されているようであるが、ここでは佐々木秀一抄訳の『黒偉人』と満川亀太郎の『黒人問題』を取り上げて、当時の日本に於いて黒人問題が取り上げられた理由とその扱い方を検討してみたい。

大正十二年（一九二三年）、『黒偉人』の題名で佐々木秀一が訳したのは、黒人の教育者でタスキーギー学院の創設者であるブッカー・T・ワシントンの自伝、『奴隷より身を起こして』(Up from Slavery)である。ワシントンは、明治四十一年に小河内縁著の『偉人の青年時代』の中で紹介されているし、大日本文明協会出版の『泰西英傑伝』の第五巻に、白人の奴隷解放運動家、ウィリアム・ロイド・ギャリソンと並んで佐々木秀一によって紹介されている。何故ワシントンがこのように取り上げられているかは、当時の風潮をよく反映していると思われる、後に改めて触れることにするが、佐々木秀一はワシントンの一生を「一個の犠牲的熱血男児の奮闘史」<sup>(1)</sup>と見ているのである。序文の中で彼はワシントンの一生を次のようにまとめている。

日本人の人種観と黒人問題

「ワシントンは實に一千八百五十八年か九年かに、名もなく家もない一黒奴に生れたが、止み難い向上の一念に駆られて、その少年青年時代の修養に専念努力した有様は、全く世の常の苦学談などその選を異にして居る。私は先づ氏の母が、奴隷解放当時の感激の條を読んで泣かされた。又それに次いで、氏の少年青年時代の苦学の方法が、全く普通の社会に見難い有様なのにいたく同情を動かした。

ワシントンは又、当時開放せられて間もない四百万の黒奴―一旦その身の自由を得たとは言ふものの、全くその日から寄る邊もなく、独立の力もなく、無智無職無産の黒奴の開發指導の為に一身を犠牲にし、一千九百十五年十一月十四日、遂に倒れて後止むまで奮闘した有様は、実に近代稀に見るの一大偉蹟である。<sup>(2)</sup>」

又、佐々木はワシントンの自伝を翻訳する決意をした理由を、「今や世運が転じ、時代が進んで、かくの如きの人格を必要とすることが漸く切になつた。全く自個の腕一本で自分を高めて、そして世の為に全く己を忘れる底の人物を要することが益々急になつた<sup>(3)</sup>」と記している。更に彼は、「私はこの人を日本に紹介したのは、全く日本の現在及び将来に於ては、如何なる人物よりもこの主人公の人格を最も必要と感じたからである<sup>(4)</sup>」と言う。ワシントンの生涯が日本人の「模範」<sup>(5)</sup>になるという佐々木秀一の考え方は興味深い。というのは、このワシントンの『奴隷より身を起こして』は誠に見事な西欧文明への同化と立身出世の物語りで

あるからだ。ただひたすらに西欧文化を身につけ、白人の社会に役立つ職人的黒人の養成につとめ、ホワイト・ハウスに招かれ、ヨーロッパに旅し、白人との協調を唱えて白人聴衆から大喝采を博したことを人生の最上の幸福と考えた一人の黒人の自伝であり、深く思考することなく、がむしゃらに一つの目的にむかつて邁進した男が浮彫りにされているものである。この自伝の中には奴隷制に対する怒りも疑問もない。何故白人が黒人を支配するようになったか、その支配が黒人の心の中にどのような痕跡を残しているかに関する洞察もない。

一九世紀の後半から二十世紀の初頭にかけてアメリカで出版された黒人の伝記的な名著が三つある。一つは、この『奴隷より身を起して』(一九〇一年)であり、他の二つは、フレデリック・ダグラスの『自伝』(*The Life and Time of Frederick Douglass*) (一八八二年)と、W・E・B・デュボイスの『黒人の魂』(*The Souls of Black Folk*) (一九〇三年)である。この三つの中でワシントンだけが日本に紹介されたという事実は、当時の外国文化との接触が大きく偶然に左右されていたということ、又、アメリカ国内に於ける評価ということだけではなく、勉勵刻苦が必ず正しい道に通ずると信じたワシントンの生き方が、当時の日本人に要求されていた粹に相当であったということを示しているのではないだろうか。終生、奴隷解放のために白人と斗い、白人が黒人を支配するに到った経過とその機構に鋭に洞察を示したダグラ

スや、奴隷制やその後の白人の偏見が黒人の心に残した傷を美しい詩のような言葉で綴り、アメリカに於いて黒人であることはどういうことかを問いかけたデュボイスは、当時の日本では理解出来ない人々であり、又不用な人々であったのではないだろうか。

## 註

- (1) 佐々木秀一抄訳『黒偉人 ブーカー・ワシントン』泰光社 五頁
- (2) 前掲書 五―六頁
- (3) 前掲書 二頁
- (4) 前掲書 一頁
- (5) 前掲書 一頁

## (五)

おそらく黒人問題に関する最初の単行本は満川亀太郎の『黒人問題』であろう。大正十四年十一月に二西名著刊行会から出版されたこの本は、本田創造氏が「ある黒人問題の本」と題する『アメリカ社会と黒人』の中に収められた一文でも取り上げているように、多くの問題を含んだ興味深い本である。著者満川亀太郎は明治二十一年生れ、東京外大中退の後、新聞記者となり、やがて拓殖大学の教授として東洋事業を担当し、興亜学塾や大亜協会に関係した人だということである。<sup>(1)</sup> 黒人問題に関してはこの著書の他に『黒人問題大観』という著書があるそうだが、十数冊の著作の中に『奪われた亜細亜』、『世界情勢と大日本』、

『東亜人種争史観』といったものがあることを見ると、この著者の立場が自然に明らかになってくるであろう。しかし、以下、内容に触れながら作者の立場を考えてみたい。

序文の冒頭に次のような言葉がみえる。

「奴隷解放の恩人アブラハム・リンカーンと共に、我が牧野伸顕伯の肖像が黒人の家庭に飾られて居るのは何故であるか。

巴里会議に於て我が全権より提出せし人種差別待遇撤廃案は、強大国の壓迫によつて通過を見なかつたが、それは正しく白人専制の根城に向つて投じたる爆裂弾たるに相違無かつた。国際聯盟といひ、国際協調といふ。虐げられたる有色民族を除外して何の人類愛ぞ。何の世界平和ぞ。」<sup>(2)</sup>

次で著者は自分の立場を次のように表明している。

「奪われたる亜細亜を奪還せんがために、著者は十年同志を天下に求め、聊か心身を勞して来た。亜細亜と同じく搾取せられたる阿弗利加、黄人と同じく壓虐せられたる黒人、そは必然に我が精神を傷ましめねばならぬものであつた。」<sup>(3)</sup>

ここで何故作者が黒人に興味を持ったかが明らかになってくる。大正期の国際情勢の中で多くの日本人が抱いた日本の立場とその進路がかなり誇張された形で示されていると言つてよいであろう。

そのように、この本は一つの立場を強調したものであり、著者自ら、

「本書は黒人問題に就いて多くを盡せるものではない。情に激して理を究むるに疎かなる著者が、ただその輪廓を傳へんと欲して邦文の最先を汚せしを自ら耻づるのみ。」<sup>(4)</sup>とも言っているが、黒人の発生とその人類学的な説明、奴隷制の歴史、ヨーロッパに於ける奴隷解放、米国の奴隷問題、南北戦争、ヨーロッパ人によるアフリカ分割、奴隷解放後のアメリカ黒人、リンチ、黒人の教育といった点に関して、『クライシス』のような黒人の雑誌とか、幾つかの人類学、歴史学の著書、スタンレー等のアフリカ探検の記録等をもとにした資料にもとづいて、多くの数字と客観的資料を、「日本人と黒人と何の関係ありやと疑ふ」<sup>(5)</sup>人々に示し、日本人の中に黒人への関心を高めようとしている。しかし、彼の情報は雑多であり、統一を欠いている。その第一の問題点は彼の黒人の定義の曖昧さであろう。それはアフリカの黒人、アメリカの黒人、大洋州の原住民の全てを一まとめにした「黒人」なのである。又、彼には黒人のたどつて来た様々な歴史に対する人間らしい共感がある訳ではない。彼が黒人問題に興味を持ったのは、内村鑑三の『愛吟』の中に収められたローエルの「ロイド・ガリソン」の訳詩と、松村介石の『社会改良家列伝』の中のウィルヴァフォースの伝記とにはじまるのである。彼の目には、黒人の歴史、その解放への道は何人かの英雄的人物の偉業として写っているのである。彼は、英国のウィルヴァフォース、ギャリソン、リンカーン、ブッカー・T・ワシントン、そしてマークス・ガーヴェイと

いった特定の人物に多くのページをさいているが、これは一種の英雄崇拜である。この著者は、これらの人物の出現を可能にした社会の必然性、下部からの要求というものには、何の関心も持っていない。

これらの英雄的人物の中で、著者の最大の関心をひいているのが、一九二〇年代の初めにニューヨークに本拠を置いてはじまった、マーカス・ガーヴェイによる黒人共和国建設運動である。この本の中表紙には「十九世紀に於て白人は黒人より人を作れり。二十世紀に於ては欧州は阿弗利加より世界を作らむ」という、ビクトル・ユーゴーの言葉と共に赤黒緑三色のガーヴェイの黒人共和国の国旗が描かれているのである。当時、アメリカの白人達は言うまでもなく、多くの黒人達の批判をも浴びていたガーヴェイ運動が、この著者にはどのように思えたのであろうか。

「今、米国紐育の一角に赤黒緑の三色旗が翻つてゐる。黒人阿弗利加共和国。それは決して空想ではない。進水を終えて艦装中に在るドレックドノートたるまでのことだ。奴隷の子孫一千万人を艦員として、民族闘争の波濤の中にその雄姿を現わさんとするは断じて遠き将来ではない。」<sup>(6)</sup>  
この艦長となりやがて一億五千万の黒人の指導者になると彼が考えたガーヴェイは、「彼の周囲に狂するが如き尊敬と信頼」<sup>(7)</sup>を集め、狂漢の銃弾を受け「傷口より流れる鮮血を浴びながらも敢然として」<sup>(8)</sup>演壇に立つ超人である。そして彼は、「他日太平洋を中心とする第二次世界大戦

の狂瀾怒濤の逆捲くことあるべき場合、黒人一億五千万の向背は、如何に偉大なる影響あるかを想へ」<sup>(9)</sup>と述べ、我々がガーヴェイの運動に注目し、有色人種として黒人種との団結を考えるのである。

ここで著者満川亀太郎の思考のどこに問題があったかを考えてみたい。一つは前にも述べたように、歴史的、社会的視野の欠除である。例えば南北戦争は全く奴隷解放のためだけの戦争と考えられて居り、リンカーン一人の功績のように考えられている。「リンカーンの演題は悉く奴隷解放の義声ならざるは無かつた」<sup>(10)</sup>と言ひ。南北戦争は北部の正義が南部の悪と斗ひ、「北軍の大勝利」<sup>(11)</sup>に終つたものであり、リンカーンは「正を履んで恐れず、光輝ある人類歴史の上に米国を建て直した」<sup>(12)</sup>英雄なのである。

又、著者は、アフリカに関する知識が余りにとぼしかった。彼は、黒人を「零点下の暗土より抬頭し来らんとする」<sup>(13)</sup>ものと考え、アフリカは何ら文化の存せぬ暗黒の大陸であるとし、土着の文化の存在を無視しているのである。満川は十九世紀末から第一次大戦後に起つた民族主義による多くの独立国の出現をこの黒人問題と結びつけてしまったのである。<sup>(14)</sup>黒人は一つの団結した集団となり得るといふ考え方は、ガーヴェイ運動の失敗の一つの原因でもある。又、アメリカに三百年も住まされてしまったアメリカの黒人達は、最早、アメリカ人以外の何物でもなかった。この文化とアイデンティティの問題に対する認識が著者には欠けて

いたのである。そのために、現実感に貧しい夢のようなガーヴェイ運動が、アジアの統一を願う一人の日本の青年の心を動かし、これを「世界的民族運動<sup>(16)</sup>」と思わせたのである。

彼には、「アフリカをアフリカ人に返せ」というマークス・ガーヴェイの声が、「アジアをアジア人の手に」という白人支配への反撥の声としてきこえたのであり、東洋の盟主としての日本の地位を願う自分が、ガーヴェイと二重映しになって見えたのであろう。そして彼はこの本を次の言葉で結んでいる。

「世界の新紀元を開かんとする人種革命の苗床、それは疑いもなく黒人阿弗利加である。太陽を理想とし、太陽の如く万物を照らさんとする日本民族は、この苗床の伸びて行くことを人類の幸福の為に期待すべきである。」<sup>(16)</sup> 本田創造氏も指摘しているが、この著者の持っていた「危険思想」<sup>(17)</sup>を云々することは容易なことであり、この著者の多くの欠点を指摘することも難かしいことではない。しかし、忘れてはならないことは、この本が大正の末年、日本が多難な昭和期に入る境の時期に書かれていることであり、当時に於てこれは「危険思想」ではなかったということである。「世界は白人のみの為に造られたるものに非ざること」<sup>(18)</sup>を証明しようとして書かれたこの本が、当時の日本人の心の中にあつた世界の中の日本のイメージを拡大して写し出した一つの鏡であつたと考えられる。

(付記)

この問題について考え始める前に、一つの仮説を立てていた。それは、日本の社会主義者達がアメリカの黒人問題に關しての何らかの言及をしているだろうと言うことであつた。特に、片山潜、幸徳秋水といった人々はアメリカでの生活を経験していたからである。しかし、この仮説は当らなかつた。日本の社会主義者達がアメリカ黒人問題、アフリカの問題に目をむけるのは、一九二八年夏、モスクワで開催されたコミンテルン第六回大会で植民地問題が討議された後、アメリカ共産党がその政策の中に黒人問題を取り入れるようになってからである。この昭和期に入つてからの黒人問題に対する態度は、いづれ稿を改めて書きたいと思つている。

註

- (1) 本田創造 前出書 一三八―一九頁
- (2) 満川亀太郎『黒人問題』二西社名著刊行会 大正十四年 一頁
- (3) 前掲書 三頁
- (4) 前掲書 五頁
- (5) 前掲書 二頁
- (6) 前掲書 二頁
- (7) 前掲書 二八三頁
- (8) 前掲書 二八二頁
- (9) 前掲書 二頁
- (10) 前掲書 一七九頁

日本人の種観と黒人問題

- (11) 前掲書 一七九頁
- (12) 前掲書 一七三頁
- (13) 前掲書 一頁
- (14) 前掲書 三頁
- (15) 前掲書 一頁
- (16) 前掲書 三一頁
- (17) 本田創造 前出書 一三八頁
- (18) 満川亀太郎 前出書